

お須磨

美知代

お須磨、お須磨、戀しいお須磨！

此様な事を云へば畢竟は私の耻を世間へ晒す様なものでありますけれど、私は今更にお須磨戀しさに泣くのであります。泣けばとて此遣瀬無い悲痛の去るべきではない、けれども只涙の中にお須磨を思ひ想ふのがせめてもの慰藉なので……、女々しい奴と一口にけなしては被下いますな。世にありふれた惚話とは違つて、これでも私は眞面目なのであります。

お須磨は私の先妻で、生家は貧しい水呑百姓、世話して呉れる人があつて苦しい中に二人一緒にたつたのは、左様、お須磨が漸と十七の春でした。其頃私は師範の講習部を出て、たつた一人の老祖父を養ふべく、故郷の小學校に通ふて居ました。だが、何を云ふにも僅かの月給、ともすれば追はれ勝な生活の中に、病身な老祖父をかへて良人大事に、何彼と不自由のないやう、自分の身装には根つから關はず、馴れぬ世帯にやつれて、内職の針仕事に夜を更かすいぢらしさ、終日眞黒に成つて立働いて居るのを見ては、假令心ある人でなくとも、年とも行かぬに感心な嫁御と、心から賞めないでは居られまいと思はれる位。併し私は根が斯うした氣質とて、生やさしい芝居めいた臺詞は云ひ度くても云へません、で、只もう心には不慥な奴と思ひ乍ら、ついに一度慰めの言葉を口にするでもなく、學校が退けると、蟲を噛みつぶして、書齋と定め

た一室に籠るのが癖。

其後私は運好く某郡農事巡廻教師を奉職して、私共一家は某の町に移り住む事となりました。山の中の戸數僅か千にも足らぬ田舎町ではありますけれど、割合に開けた土地柄で、従つて當世的才學を備へた婦人も少くはなかつた、であるのにお須磨は其方面にかけては全くゼロ、悲しいではありませんか、働きの彼女は尋常小學校すら満足に濟ましては居ないので、他所ほかの細君に比べて私は甚だに肩身窄い念をしただてせう、實際失望せざるを得ませんでした。

一度御挨拶に出なければと云ふので、私はお須磨をつれて郡長の宅を訪れましたが、夫人は此町の婦人會長で、見るから趣味の高い交際家らしいとりなし、何を問はれても何を話しかけられても、お須磨には碌々答へが出来ません、其癖夫人は決して高慢な口をさくのではなく、随分力めて調子を合せ被下るので、それを傍に見て居る私は郡長と話す空もなく、只はらくするばかりでした。

『私は一向もう無教育なものですから……』

お須磨は顔を赤くして俛いたまゝ、慚愧、堪り兼ねて私はそこ／＼に暇を告げて歸りました。ですから其後度々婦人會から入會をと迫られても、家事の都合を口實に體よく斷つてばかり、成るべくお須磨を人中に出さぬやうに／＼と力めました。而して終にはお須磨を妻として見るべく厭はしい様に思はれて、いつそ一思ひに思ひ切つた處置を……とも思つて見ました。だが、よく／＼考へると、さんざ苦勞を掛けて是からと云ふ今になつて左様した薄情な事も出来ません、それにお須磨の

方でも酷く自分の無教育を氣にかけて、折々『私これから少し勉強を初めませうかしら、だつて此様に何も解らないじや困りますもの、六十の手習と云ふ事も御座いますねえ、それから比べると私なんかまだ若いのですから、ねえ貴郎、如何思つて被下つて？ けども駄目でせうか』等と申譯じみた事を云ふかと思へば、又時には遺瀨無げな溜息をついて、

『私は何故斯う無教育でせう』
斯う云つた眼には最早美しい涙が閃いて居るのですもの、あゝ何と云ふやさしさ！

『私本當に貴郎に濟みませんわ、甚麽にか肩身のお窄い事とせうと思つて：：』

『最早好いよ、其様な心配はしないでお呉れ、私は何とも思つてやしないから』とか何とか普通ならば巧く慰めて遣る所ですけれど、其處がそれ私の性質として出来ません、つい心にもなく『馬鹿！』と怒鳴るので、此様な有様で面白くもない月日を送り迎へて居ります程に、お須磨は重い流行性感冒で二週間ばかり患つて死亡しました。

それから半年餘り獨身で居たのでありますが、郡長夫人の肝煎で二度目を貰ふ事となりました。後妻と云ふのは豫て見知りの方教師で、一寸した容色よしの氣輕相な、全く教育の程度や何彼の様子が、先妻のお須磨とはガラリ違つて、實の所、私の胸には云ひ知らぬ暖い血汐が湧き立つのでありました。

嗚呼けれど、新しい家庭は思つた程楽しくはありませんでした、否寧ろ不愉快で、結婚して三月の後には私共はさながら

仇敵でもあるかのやうに、日毎いがみ合つて衝突するのです。

『何だつて此様な家へ來たんだらう、私貴郎の様な氣むづかしい人とは知らなかつてよ』

『左様か、俺だつて全然絶望しちやつたよ』
『え、口惜しい、情けない！ 私最早歸るわ』

『へん如何でも勝手にするが好い』

此様な烈しい會話を取り換はず事も屢々、やがて其内にお須磨の一週忌は近きました。私は今更の様に亡妻を思つて、餘りと薄情であつた自分の所行を悔ひ、折柄の日曜を靜に書齋にこもつて、懐しい過去を思ひ續けるのでありました。と入つて來たのは妻で、

『貴郎随分ですわね、先の奥様の御法事だと云ふに、何だつて其様に澄し込んで被居るんですよ、本當に可笑しな方だわ、佛壇一つ飾つてあげやうとはなさらないで、併し何も私に關係した事じやなし、其様事如何でも好いけれど：：兎に角餘りですよ、ホ、ホ、』

私は其云ひ方が如何にも癪に障るので、

『何法事なんかしないて好いさ』

何ですつてまあ、呆れた薄情ね：：、貴郎はそれで好いか知りませせんけれど、懇意な先へ配り物一つしないじや、私本當に世間體が悪いじやありませんか』

『ふ、ん世間體か：：、お須磨はな、はばかり乍ら其様な形式的の法事は嫌だつてさ、今更改めて何も佛壇を飾るにも及ぶまい、俺は彼女が死亡つてからと云ふもの、只の一日も忘

れた事はない、如何にもお須磨はお前と違つて無教育だつた、けども妻としての本分は却つて、：：俺は絶えず心で泣いてるんだぞ』

私は最早々々堪へきれないで、思ひ切つた事を云つて、遮二無二家を飛び出した儘、何處ともなく歩き廻るのであります。

考へて見ると、それは一時の狂氣染みた怒りてありますけれど、つまりは壓へ壓へた日頃のいざもどがふき出したので、私は以前お須磨をあれ程冷酷待遇つて置き乍ら、今更其有りかたさが解つたので：：。

あゝお須磨、お須磨、假令無教育でも私はお須磨が戀しいのです。